

としょぶらり

米子高専図書館情報センター報

ISSN 1344-5634

第 81 号

平成 18 年 7 月 1 日発行
 米子工業高等専門学校
 図書館情報センター



撮影：物質工学科 5年 生田寛子

目 次

「新任教員のお勧めする本」	2
米子高専文化セミナー報告	6
新着図書の紹介	6
図書館統計	7
平成17年度利用状況	
NDC分類別貸出冊数・貸出率	
平成17年度学生利用状況	
平成17年度学生利用冊数ベスト3	
平成18年度学生図書委員会名簿	7
平成18年度（第33回） 校内読書・エッセイコンクール応募要項	8

**平成18年度
米子高専文化セミナー**
 とっとり県民カレッジ連携講座
 高専の知・技・夢をみなさまにお伝えします!!

第1回 5月27日(土) 午後2時～4時
「計算しない授業」
～数科目(数学) 大塚 真由

第2回 6月17日(土) 午後2時～4時
「ネイチャーライティングの世界」
～数科目(英語) 中島 真由子

第3回 10月28日(土) 午後2時～4時
「しのび寄る彼岸」
～芸術科のおはなし
情報工学科 河田 久美

第4回 11月25日(土) 午後2時～4時
「イメージジェネレーターの展開」
～画像加工の難関手段として
情報工学科 高川 真由

会場：米子市公会堂 中ホール
定員：40名 参加無料
問い合わせ先：
米子高専図書館
TEL 0859-24-5006

主催：米子工業高等専門学校図書館情報センター
ホームページ <http://www.yonago-k.ac.jp/toshu/>

新任教員のお勧めする本



本に親しむこと

一般科目(数学) 西垣 誠一

今回学生の皆さんに勧める本の紹介を依頼されて、まず考えたのは自分が高校生だった頃どんな本を読んだかなということでした。しかし、これがかなり昔のことなので、あまりよく覚えていないというか思い出せません。「日本の歴史」とかいう全十巻以上もある文庫本のような大きさの本を読もうとして、最初の数巻で挫折したような記憶もあります、基本的に高校生の頃は、宿題と受験勉強に追われていたのだと思います。さて、大学生時代は結構本を読みました。乱読というほどではありませんが、意識しているいろいろな分野の本を読みました。文学作品ばかりではなく、専門の数学とは関係のない経済学や哲学に関連した本も読みましたし、漢詩なども興味をもって読んだ時期もありました。(勿論その道の専門書ではなくいわゆる文庫本・新書本の類ですが。)しかし、ここではやはり文学作品をいくつか紹介したいと思います。

まずは、「三国志」です。中国の魏・呉・蜀の時代(西暦200年代)の歴史小説で、蜀の劉備を中心として、魏の曹操・呉の孫権などが織り成す壮大な歴史ドラマはまさに読み応えがあります。有名な人物としては、劉備に軍師として仕えた諸葛孔明が登場します。三国志はいろいろな人の本が出版されていますし漫画もありますが、私が読んだのは吉川英治の講談社文庫のものでした。全八巻くらいだったと思いますが、どんどん読めた記憶があります。

次に、アレクサンドロ・デュマ作「モンテ・クリスト伯」(岩波文庫)です。主人公エドモン・ダンテスが囚われの身となり……。あらすじを書くことはやめて、読んでのお楽しみとしましょう。これも全七巻だったと思いますが、面白くて次から次へと読みたくなり、一気に読んでしまったように記憶しています。時代が変われば好みも変わるので、本もいろいろと新しいものが出て古いものは消えていきますが、こうして百年以上もたった今日でも読み続けられているものには、やはりそれなりのものがあります。

さて最後に私の趣味に関連して。大学生の頃からオペラにはまってしまい、オペラを実際に観ることも多いのですが、そのオペラの題材となった元の話を知りたくなり、オペラ関連の作品も随分読みました。その中でもお勧めは、デュマ・フィスの「椿姫」(新潮文庫)です。このデュマ・フィスの本名は、アレクサンドロ・デュマで「モンテ・クリスト伯」の作者と同名ですが、実はその息子で通称デュマ・フィスと呼ばれています。(フィスとはフランス語で息子という意味です。)これを題材としたオペラはヴェルディが作曲していて、有名なオペラの一つです。そして、この「椿姫」の中に出てくるアベ・プレヴェー作の「マノン・レスコー」(新潮文庫)もお勧めの1冊です。これら2冊は全何巻というものではありませんので、大作はちょっと・・・という方でも大丈夫です。2冊と

もいわゆる恋愛小説の部類に入るのでしょか。

以上、あまりよく考えもせず思いつくままの本を挙げましたが、本に親しむことは知識そのものを得るばかりではなく、いわゆる人としての幅を作るものだと思います。皆さんも、ここに挙げた本ということだけでなく本に親しんでみてはいかがでしょうか。



大竹美喜氏の『人生大学』という本

一般科目(社会) 加藤 博和

「♪よ〜く考えよう、お金は大事だよ〜」のCMでお馴染みの生命保険会社といえばアフラック(アメリカンファミリー生命保険会社)である。その会社の創業者が、私の郷里の広島県北の人だと知ったときはとても驚いた。大学院で経営学を勉強していた数年前のことである。大竹美喜氏は1939年、庄原市に生まれ、1974年にアフラックを日本に設立し、日本で初めて「がん保険」を発売。以来、経営トップとして同社を率い、2003年からは同社創業者・最高顧問として活躍されている。

その大竹氏が自身の少年時代から現在の夢までを自伝的にまとめた『人生大学—信念で生み出した私のビジネスモデル』(扶桑社、2003年)という本を出版され、私はその本を校正段階で読ませていただく機会を得た。“ネイティブ”として文中の会話表現(広島弁)のチェックを依頼され、送られてきた大量の原稿を精読したことを思い出す。2002年11月末から12月初めにかけて、アフラック広報部の杉本麻衣子さんとやり取りした草稿などが手元にある。杉本さんは修士時代の同窓であるが、彼女が大竹さんとの縁を作ってくれるとは思ってもせず、感謝している。

第一部「原点」では、17歳直前の大竹少年が小説家になるという夢(それは早く大人社会への仲間入りをしたという気持ちでもあった)を膨らませ、居心地の良い故郷を後に、大阪の知人の新聞配達店を頼って家出したが挫折。高校時代の様々な体験や、「自分が何者であるか」という問題に悩み、もたえ苦しんでいた時代でもあったことが綴られている。第二部「夢」では、当時の庄原市長に勧められて農業短大へ入学したものの、渡米。厳しい留學生活、キリスト教の洗礼。帰国後、代議士秘書からアメリカ系損保会社のセールスマンに転じるなど数々の人生経験が語られている。第三部「飛躍」では、アフラック(米国ジョージア州に1955年に設立された小さな保険会社)創業者のエイモス3兄弟に出会い、アフラックを日本に設立する決意をした後、新規参入が難しい日本で2年半に及ぶ大蔵省、厚生省との粘り強い折衝を経て、1974年10月に営業認可が下りるまでの挑戦と、代理店方式の導入や独自の商品開発など積極果敢な経営で同社が国内最大の外資系生保に成長する過程が描かれている。

第四部は「想い」である。それまでの私は「結局アフラックは米国流のビジネスモデルで成功した“勝ち組”だ」(杉

本さんへのメール)と安直に捉えていたが、「グローバルスタンダードでもなく、従来の悪しき体質の日本でもない、新しい価値観と位置軸を持つべき」と唱える大竹氏の経営理念や哲学に触れ、浅学を恥じた。最終章は「感謝」となっている。

本当にやりたいことは一体何なのか——「非常に迷い多く放浪続きだった」前半生。それでも「常に自分を励まし、目標をしっかりと確認し、それに向かって努力することを心がけ」、32歳でアフラックとがん保険という「自分が本当にやりたいこと、好きで好きでたまらないことを見つけ」、経営者として日本での成功をリードし、後継者にバトンを渡された。失礼ながら『人生大学』というタイトルはやや暗い印象を受ける」というのが私の率直な第一印象だったが、「人生経験大学の優等生になれ」という父母の教えを体現され、今も挑戦し続け、感謝を忘れない大竹氏の半生を通して、人生を切り拓いていくことの積極的な意味を見出すことができる。



「！」を見つける

建築学科 白枝 伸

「！」と思ったらカメラのシャッターを切る。あっちでもこっちでも。出かけた先で気になったところがあればとりあえず写真におさめておく。建築などを見に行こうものならば、見るものをなめ回すかのように写真を撮りまくる。ありがたいことにデジカメを持つようになってからは現像代を気にする必要がなくなったために、尚その枚数は増えている。そしてパソコンの中にはそれらの大量の写真が保存されている・・・と言うと聞こえは良いが“押し込んでいる”と言った方が良いかもしれない。そう、アイデアを練る糧として「そういえば！」とその写真を引っ張り出そうとするのだが、そんないい加減な性格のために、いざその時には見つからない。でもそれは見つからないことが問題なのではなく、撮ったそのものを覚えていないことが問題なのだと思う。写真を撮ったことで覚えてしまう満足感。この指先一押しでわかったような気になってしまう満足感が全く良くないことなのである。

そんないい加減な頭を「がつーん！」と殴られたような思いにさせてくれた本がある。ひとつは建築家の中村好文さんの『住宅巡礼』である。ここ数年の建築ブーム(?)で、雑誌などで目にしたことがある人もいない“ル・コルビュジェ”や“フランク・ロイド・ライト”などなどの20世紀を代表する建築家が設計した住宅を作者が訪れ、わかりやすく紹介してくれている本である。なかなか本を読まない私でもすんなりと読めてしまうようなとてもわかりやすい文章と、そして何よりも味のある楽しいスケッチで構成されている。“スケッチ”のいいところ、それは写真とは違って作者が見たもの、感じたものがより強調して描かれていることだ。「！」と感じた部分を作者の視点で観察をして描いている。必要のないものは省かれ所々メモ書きなどをしていたりするから、より感じたものが伝わってくる。目でしっかりと観察をして

手を動かして身体でインプットしていく。一押しのインプットとは違って、描き留める時間その場にとどまることで、風の流れる音を聞き、その風に乗って薫る香りを嗅ぎ、描くそのものを触れてみたりもできる。そう、スケッチは五感を使ってインプットしていく。それはその後の自分の十分な糧になってくれるに違いない。またスケッチをしている時間は、忙しい日常から離れて、刹那な時間でも手に入れることができるゆったりと流れる素敵なひとときなのかもしれない。

もうひとつそんな素敵なスケッチと文章で構成されている本を紹介しようと思う。妹尾河童さんの“河童が覗いた・・・”シリーズである。『河童が覗いたニッポン』『河童が覗いたヨーロッパ』が手元にあるのでこの二冊。こちらも作者が旅先で出会った気になったものが文章と共に描かれている。とても細かい。ふとすると見落としがち部分にまで目がいつていることに関心しっぱなしで、それどころかドキドキ感が生まれてくる。日常の当たり前だと思っていることがちょっと視点を変えただけで素敵なものに見えてくるのだから。そんな楽しさと発見を教えてください本である。

さてこの辺で「！」と思われる方もいるかもしれない。こやつは本を読まずに絵だけを見てるんじゃないかと。まあ、そんなことは気にせずちょっと手に取ってみてください。実はあなたのその側にとっても素敵な「！」があるかもしれませんよ。スケッチブックをもって散歩してみませんか?なんでしたらカメラでも良いかもしれませんけどね。



10代の頃に読んでおけばよかったと思う本

建築学科 田口 陽子

私の高校時代はあまり本を読むほうではなかったのですが、そういう私が10代のころに背伸びをしてでも読んでおけばよかったと思う本を、三冊挙げてみたいと思います。橋爪大三郎「はじめての構造主義」

この本は、ちょっと進んだ高校生やかなりおませな中学生でも読めるように、現代思想の抽象的で難解な内容が、平易で読みやすい文章で書かれています。とはいっても、私自身理解できたかどうか正直かなりあやしいのですが、少なくとも読み終わった直後は、理解できた!という気になりました。いまここで「構造」とは何か?と聞かれたら、頭を搔いてごまかしてしまいそうですが、それでも説明できそうなことが幾つかあります。レヴィ・ストロースという人物が構造主義の生みの親であること、「機能」としては不要と思われるモノの存在理由が「構造」で説明できること、近親姦姦タブーの理由は親族の構造にあること、モノやコトバなどの交換つまりコミュニケーションをするのが人間であることなど。うーむ、やっぱり私からはうまく伝えられないですね。本のほうが分かりやすいので、少しでも興味を持った人は是非読んでみてください。現代思想を少しかじっておくと、この先コム

新任教員のお勧めする本

ズカシイ文系の人と議論になったときのネタくらいにはなるかと思えます。

フランソワーズ・サガン「悲しみよこんにちは」

みなさんのなかには、「悲しみよこんにちは」を読んだことのある人もいるのではないのでしょうか。この4月から10代と接する機会が増えて、サガンが18歳のときに書いたこの本を自然と思い出しました。ストーリーはというと、17歳の少女が父の恋人をどんどん精神的に追い込んでしまうというものです。20代後半でこの本を読んだとき、まだ学生だった私は「そうそう、オトナって冷めててイヤだよね～」とコドモの視点からのんきなことを思っていたのですが、いまは教員として若い世代と接し、反対にオトナとして学生から見られる立場になりました。でも、まだまだ若いつもりでいますし、みなさんと近い視点は失いたくないと思っていますので、どうかオトナイじめ(?)はほどほどにお願いします。

谷崎潤一郎「陰翳礼賛」

最後に、建築デザインに関連する図書として、谷崎潤一郎の「陰翳礼賛」を紹介します。一般的には、この本は西洋との違いに着目して、暗がりのなかに日本的な美を見出した本だと言われています。その中に「人はあの冷たく滑らかなものを口中にふくむ時、あたかも室内の暗黒が一箇の甘い塊になって舌の先で融けるのを感じ、ほんとうはそう旨くない羊羹でも、味に異様な深みが添わるように思う」という有名な一文があります。現代ではヨーロッパのほうがロウソクの明かりで食事をする人が多いので、それが本当に日本的な美であるかどうかはよく分かりませんが、暗い空間で羊羹を味わうことの価値を発見し、それを美しい文章で表現したのが谷崎のすごさではないかと思えます。この本を薦めるから、私が羊羹の味わえる暗い空間をデザインするかといったらそういうわけではありません。でも、観察による価値の発見と、誰でも理解できる洗練された「美しい」(「楽しい」とか「面白い」でもいいです)表現は、まさにデザインに通じる行為ではないかと思えました。デザインに正解がないと言われるのは、このように観察・表現の仕方が人それぞれだからかもしれませんね。

これに触発されて「チョイ背伸び読書」をする学生が増えることを密かに期待しています。



微笑みながら読む

建築学科 松本 幸大

読書の経験が少ない私ですが、今まで読んだ本の中で、共感を覚え、読んでいてつい微笑んでしまう、とても楽しい内容の本を紹介しようと思います。

「気がつくと、僕は小林真だった。」という文で始まる森絵都さんの「カラフル」は一言でいうとコメディイということになるのですが、とても心が温かくなりますし、少し泣けてくるところもあって、今読んでも、とてもなつかしい気持ちになります。かなりアバウトな天使と、小林真の身体にホームステイしているボクとの掛合い漫

才のようなやりとりを通して、昔も今も、どこにでもあるような、中学生の学校生活のいろいろ、家族のいろいろが描かれています。ときには驚く場面もありますが、それらもあり得ないことではないと感じさせます。そして、いつでもどこにでもあるかもしれないけれど、一つ一つ、一人一人みんな違っているということ、自分の回りの世界は自分から見ている側だけで成り立っている訳ではなく、当たり前ですが、相手の側から見た世界は全く異なっていたりすること、などなど、小林真の身体を借りているボクは、一度死んだはずの小林真と家族や友人、同級生たちとのやりとりの中で改めて学習していきます。最後には、このホームステイが持つ意味を理解することになります。そして、題の「カラフル」ということばの意味しているところも分かんと思います。

森絵都という作家は、1968年生まれでこの作品は1998年に書かれたものです。ですから、30歳のときに書かれたわけですが、とても中学生の男の子の感性に近いものを持っておられるように感じられます。この作品以外にも「リズム」、「ゴールド・フィッシュ」など、若い人向けにたくさん発表しておられます。思春期独自の感じやすい心や、他人に干渉されたくないけど、ほっておかれるのも嫌というような微妙な心情をコメディイ風にオブラートに包みつつシュールに描いていて、すてきな作家だと思います。

さて次に、別の観点で、しかし同じように共感できる、そしてコメディイの要素も含んだ本のひとつとして「それでも素晴らしいSEの世界」を紹介します。元SE(システム・エンジニア)である著者の岩脇一喜さんの経験を基に書かれた内容は、現代社会に欠かすことのできないソフトウェアやネットワーク関係の各種業務における泥臭い一面を面白く描いています。分野は違いますが、こうした内容は、不思議とどこか共感できる内容が多く、読んでいてつい微笑み、うなずいてしまう内容が満載です。高専の皆さんの中でも経験のある方がおられると思いますが、プログラミングやデバッグ、そして寝不足などなど、あまり表には出て来ない作業と、それに生き甲斐や楽しさを感じる著者の誇りを感じ取ってもらえるのではないかと思います。最後は、いつまでもSE(To be permanently SE)と締めくくられています。苦しい一面を知りながらも、それを楽しく過ごす人生はいろいろな専門分野に携わる我々にとって、とても大切ではないかと思えます。



新しいことを発見するために大事なこと

物質工学科 里村 武範

皆さんはDNAという言葉は聞いたことがあるだろうか?最近遺伝子組換え食品などニュースに頻繁に出てくる遺伝子の本体である。DNAは非常に美しい二重らせん構造を作っている。このDNAの二重らせん構造を解き明かしたのが今回紹介する『二重らせん』の著者であ

るジェームス・D. ワトソン博士である。ワトソン博士は、このDNAの構造を解き明かしたことによりノーベル賞を取っている。皆さん、こんなところで教科書を紹介するのかと言われるかもしれないが、この本には教科書的なことはいっさい書かれていない。野心家の若きワトソン博士（DNAの二重らせん構造発見当時はまだ25歳の若さだった。）がどのような人物に遭遇し、いかにしてノーベル賞という栄誉をもぎ取ったのかということをも博士自身の目を通して見て、感じたことが赤裸々に述べられている。

ノーベル賞というと最近受賞した田中耕一さんのことを思い浮かべる人も多いだろう。ノーベル賞というのは田中さんのように社会的地位や名誉というものに無関心で研究にのみ情熱を注ぐような我々とはかけ離れた人が取るものだ、と思っている人もいるだろう。

しかし、この本を読むと科学研究というものが非常に身近に感じてもらえると思う。研究に行き詰まったら映画館に行ったり、研究室を抜け出してテニスに出かけて行っては同僚の機嫌を損ねたり、合コンに出かけて女の子を口説こうとしたり、若き日の博士の日常がいきいきと描かれていて案外我々と同じような生活をしていただと感じさせてくれる。

この陽気で気さくなワトソン博士とまじめな田中さんとはノーベル賞を取ったこと以外あまり似ていないと思われるかもしれない。しかし、二人には共通している点がある。それは、常に多くの仲間と相談し議論しながら仕事をしてきたことである。田中さんも会社の同僚達と共に夜中まで議論し研究をしていたと話しておられた。またワトソン博士も実にたくさんの研究者と議論をし、それを研究の糧としていた。この本の中でも、当時研究していたケンブリッジ大学にいる物理学者、化学者、生物学者はたは経済学者、哲学者達とも気軽に科学論議で盛り上がっている場面が出てくる。田中さんもワトソン博士も、気軽に話ができる環境にいたからこそすばらしい研究成果が得られたのだと感じさせられる。

この本は、教員同士、学生同士、そして教員と学生が分野を超えて気軽に学問や教育の論議ができる場を作ることの大切さを教えてくれる。皆さんも何か悩み事や考えていることがあったならフラッと先生や先輩の所に行って気軽に相談してみたらいかがでしょうか？



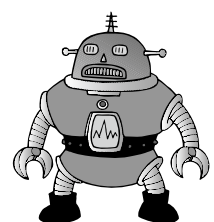
ロボットの現状と未来

機械工学科 大塚 宏一

最近は工学系の専門書しか読んでなかったのですが、お勧めする本についての紹介文の寄稿依頼がきたときは結構悩みました。工学系のみなさんが興味を持っている話題についてあれこれと考えた結果、ロボットの現状について紹介できる本はないだろうかと思い、探してみました。そこで、選んだ本が「ロボットの現状と未来」という本です。この本の紹介とともに、ロボットの現状について少し解説し

たと思います。この本は一般に専門書と呼ばれる工学系の解説本ではなく、ロボット開発の最前線で活躍している研究開発者との対談の内容をまとめたもので、専門的知識がなくてもロボットの現状と研究開発の最前線が見えてくる本でした。また、最前線で活躍されている研究者のロボットに対する未来像やこれからロボットの開発に携わる学生諸氏へのコメントなどもあり、面白かったです。

「ロボット」という言葉を聞くと多くの人が鉄腕アトムのような人型ロボットを想像すると思います。しかし、次世代型ロボットを研究している多くの人は“人の役に立つ装置”を総称してロボットと呼んでいるようです。ですから、ロボットの形はその用途にあわせた形状、例えば人命救助なら僅かな隙間でも入っていけるヘビ型、SONYのアイボなどに代表される癒し系ロボットのイヌ型など、さまざまな形のものが研究されています。そういう意味では「ロボット」という言葉の定義は非常に広いものになりつつあるのかもしれない。ロボットの活躍の舞台もさまざま、災害現場、医療現場など人命にかかわる厳しい環境での活躍が期待されています。ただ、ロボットが私たちの身近な存在になるにはまだ乗り越えなければならない問題が山積みようです。震災などの災害で瓦礫の中で救助を求めている人を捜し助けてくれるロボット、いわゆる、人命救助用ロボットは瓦礫の中を自由に移動できる機能と被害者を検知する機能がまだ研究段階にあるとのことでした。医療用の手術ロボットでは小型のロボットを体内に送り込んで遠隔操作で悪いところを治療するカプセルロボットなどの研究開発が試みられているようです。今後、このような要求を満たす工学的技術が開発される日も遠くないと思いますが、先の話のようです。この本にはソニーが開発したエンターテインメントロボットのAIBO（アイボ）やホンダが開発したASIMO（アシモ）についての開発経緯なども解説してあります。その中で、私はASIMOやAIBOと同じくらい有名なヒューマノイド（人型ロボット）のPINO（ピノ）が誰でも作れる、安くて特別な部品を使わないロボットという目的で作られたロボットであることを始めて知りました。要するにロボット開発学習用ロボットという事になりますが、それでも価格は70万円だそうです。車が一台買える値段ですが、ロボット開発費用としてはかなり安いみたいです。以上のように、この本は多角的な視点でロボットの現状と未来を考えることができる本ですから、ぜひ読んでみてください。



●●●●● 米子高専文化セミナー報告 ●●●●●

米子高専文化セミナーはビデオに撮影して図書館にDVDで保存しております。貸出も可能です。

去る、5月27日、米子市公会堂で大庭経示先生によって「(あんまり) 計算しない数楽」と題して文化セミナーが実施されました。

大庭先生はまず「4つの自然数を選ぶと、そのうちにかか差が5の倍数になる2つの自然数の組が必ず一つ以上ある。」という事について話されました。大庭先生はこのことを説明するために次のようなゲームの話をされました。それは「まずサイコロを何回振るか決め、その決めた数サイコロ1個を振る。そして同じ目が2回以上出れば勝ち。」というものです。そして、このゲームで絶対に勝てるサイコロを振る回数、その中で最も少ないものは何回かという問題を出されました。この問題は意外と当たり前の理由で説明されました。つまり、サイコロは6面なので出る目は1,2,3,4,5,6の6種類です。同じ目を2回以上出したいのであれば7回振ればどんなに運が悪くても同じ目が2回出るはずです。その後も同じようにわかりやすい説明を幾つかされ、始めのことを説明されました。その後、「一筆書き出来るか、出来

ないかを見分ける方法」について話されました。最後に「数学はスポーツや芸術のように楽しむものである。」と話されて講演は終わりました。個人的にはわかりやすく、面白い講演でした。

(3年物質工学科 野口太郎)



新着図書を紹介

学生によるブックハンティングから

学生図書委員が書店まで出向き、手にとって選んできた本の中から紹介します。

5年生機械工学科 松浦俊輔

基礎英文解釈の技術100	杉野 隆	桐原書店
超バカの壁	養老孟司	新潮社
世界を見る目が変わる50の事実	ジェシカ・ウィリアムズ	草思社

5年生生物質工学科 生田寛子

臨床医のノート	徳永 進	エム・イー振興
野の花診療所まえ	徳永 進	講談社
ジュラシック・コード	渡邊健一	祥伝社

4年生電気工学科 高橋裕也

なっとくする電磁気学	後藤尚久	講談社
よくわかる最新半導体の基本と仕組み	西久保靖彦	秀和システム
海を抱く	村山由佳	集英社

4年生電子制御工学科 野田祥子

ぐるぐるまわるすべり台	中村 航	文芸春秋
電気電子材料	大木義路	電気学会
ぼくのメジャースプーン	辻村深月	講談社

3年生電子制御工学科 尾田崇

国家の品格	藤原正彦	新潮社
細野真宏の世界-わかりやすい株の本	細野真宏	文芸春秋

3年生生物質工学科 野口太郎

天使と悪魔(上)(下)	ダン・ブラウン	角川書店
火星地球化計画	竹内 薫	実業之日本社
遺伝子神話の崩壊	デイヴィッド・S・ムーア	徳間書店

2年生電気情報工学科 戸田隆太郎

魔法の島フィンカイラ	T.A.バロン	主婦の友社
------------	---------	-------

2年生建築学科 山本順也

とく。	清涼院流水	徳間書店
ゴシックエス	桜庭一樹	富士見書房
断章のグリム	甲田学人	メディアワークス

1年生機械工学科 藤本滉太郎

10年後の日本	『日本の論点』編集部	文芸春秋
脳が若返るメモする習慣	米山公啓	中経出版

1年生建築学科 メ木彩香

県庁の星	桂望実	小学館
コンビニ・ララバイ	池永陽	集英社
ブルー・ブラッド	デイヴィッド・ハンドラー	講談社

図 書 館 統 計

1. 平成17年度利用状況

(1) 開館日数230日(時間内204日・時間外192日)

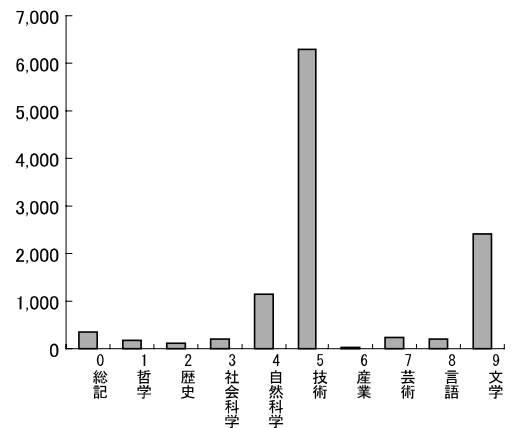
(2)入館者数・貸出者数・貸出冊数

区 分	学 生	職 員	校外者	合 計
学生・教職員数	1,056人	127人	29人	1,212人
入館者数	46,175人		236人	46,411人
図書貸出者数	5,594人	202人	128人	5,924人
図書貸出冊数	10,324冊	417冊	443冊	11,184冊



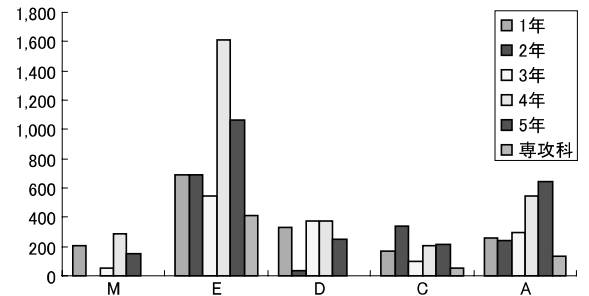
2. NDC分類別貸出冊数・貸出率

分 類	貸出冊数	順位	分 類	貸出率(%)
0 総記	339	1位	5 技術	56.4%
1 哲学	184	2位	9 文学	21.4%
2 歴史	125	3位	4 自然科学	10.3%
3 社会科学	209	4位	0 総記	3.0%
4 自然科学	1,150	5位	7 芸術	2.1%
5 技術	6,308	6位	8 言語	1.9%
6 産業	21	7位	3 社会科学	1.9%
7 芸術	233	8位	1 哲学	1.6%
8 言語	217	9位	2 歴史	1.1%
9 文学	2,398	10位	6 産業	0.2%
合 計	11,184	合 計		100.0%



3. 平成17年度学生利用状況(学年・学科別貸出冊数)

	M	E	D	C	A	合計
1 年	204	690	332	166	264	1,656
2 年	2	693	39	341	243	1,318
3 年	57	548	380	100	294	1,379
4 年	284	1,611	380	207	544	3,026
5 年	154	1,063	255	216	645	2,333
専攻科		416		58	138	612
合計	701	5,021	1,386	1,088	2,128	10,324



4. 平成17年度学生利用冊数ベスト3

順 位	貸出回数	書 名	著 者	出版社
1 位	23	灼眼のシャナ 1-10巻、0巻(電撃文庫)	高橋弥七郎	メディアワークス
2 位	17	空の境界 上・下巻(講談社ノベルス)	奈須きのこ	講談社
3 位	15	Missing: 合わせ鏡の物語(電撃文庫)	甲田学人	メディアワークス

平成18年度 学生図書委員一覧

	M 科	E 科	D 科	C 科	A 科
1 年	藤本滉太郎	長谷川裕己	小松 紀由	原 聡	メ木 彩香
2 年	東 一生	戸田隆太郎	松本 祐知	亀尾 誠二	山本 順也
3 年	山根悠一朗	關 さゆり	尾田 崇	野口 太郎	塩谷誠太郎
4 年	米田 祐二	◎ 高橋 裕也	○ 野田 祥子	○ 藤田 誠実	田村 謙人
5 年	松浦 俊輔	西尾 路彦	佐伯 哲平	生田 寛子	松本 勇氣

◎: 委員長 ○: 副委員長

平成18年度（33回）

校内読書・エッセイコンクール応募要項

- 米子高専の学生であれば「読書感想文の部」「エッセイの部」いずれにも応募できます。
- 読書感想文、エッセイともこれ以外の項目でもかまいません。

☆読書感想文の部

推薦図書

大江 健三郎	芽むしり仔撃ち	新潮文庫	宗田 理	ぼくらの七日間戦争	角川文庫
沢木 耕太郎	深夜特急	新潮文庫	宮沢 賢治	銀河鉄道の夜	角川文庫
M・ミッチェル	風と共に去りぬ	新潮文庫	坂口 安吾	墮落論	角川文庫
シェークスピア	ロミオとジュリエット	岩波文庫	壺井 栄	二十四の瞳	角川文庫
辻 仁成	ピアノシモ	集英社文庫	宮本 輝	蛭川	角川文庫
吉本 ばなな	キッチン	福武文庫	山崎 豊子	大地の子	文春文庫
高 史明	生きることの意味	ちくま文庫	司馬 遼太郎	竜馬がゆく	文春文庫
*重松 清	その日のまえに	文藝春秋	*ケヴィン・ヘンクス	オリーブの海	白水社
*木村 元彦	オシムの言葉： フィールドの向こうに人生が見える	集英社			

* 第 52 回青少年読書感想文コンクール課題図書

☆エッセイの部

以下の項目から一つ選んで、日頃自分が考えたり、思ったりしていることを自由な発想で書いてみて下さい。

- 少年犯罪について
- 日本の外交
- 個人情報保護法は必要か
- 和の心
- マスコミについて思うこと
- 尊敬する人間
- 現代の価値観
- インターネットの危険性
- ゲーム脳と子供たち
- 教科書問題

実施期間：夏休み

字 数：両部門とも縦書き原稿用紙（400字詰）5枚以内

締 切：9月1日（金）

提出先：各クラス図書委員が集めて担任へ（専攻科生は直接図書館まで）

審 査：第1次（～9月8日（金）：クラス担任より部門ごとに3編以内を選定）

：第2次（～9月15日（金）：図書館情報センター委員会において最優秀・優秀作品を決定）

審査委員：図書館情報センター長、副センター長、センター長補、図書館情報センター委員、国語科教員

表彰：部門ごとに、最優秀賞1編、優秀賞2編、佳作数編

賞状および副賞として図書券：最優秀賞 5千円券、優秀賞 3千円券、佳作 1千5百円券

表彰式：11月中

作品提示：優秀作品は「としょぶらり」誌（82号）に掲載

☆ 1～3年のうち、読書感想文の優秀作品は全国学校図書館協議会および毎日新聞社主催「第52回青少年読書感想文コンクール」の地方審査への応募も兼ねています。地方審査で優秀作品に選ばれると中央審査委員会で審査を受けることになります。

対象図書

（フィクション）：童話、小説、民話、神話、伝説、戯曲、詩歌など。

（ノンフィクション）：哲学、歴史、地誌、社会科学、自然科学、産業、芸術、スポーツ、語学、評論、伝記、随筆、紀行、生活記録、作文集、年鑑など。

（主催者の指定した図書）：上記の推薦図書のうち、*がついたもの。

☆ エッセイの部の優秀作品は、校外コンクールに応募することもあります。